

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ビザンツ文学余滴 番外編 : アルキダマス「文字で記された言論を書く人々について、或いはソフィストについて」
Author(s)	戸田, 聡
Citation	プロピレア , 23 : 121 - 131
Issue Date	2017-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044342
Right	Copyright (c) 2017 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ビザンツ文学余滴 番外編

— アルキダマス

「文字で記された言論を書く人々について、
或いはソフィストについて」—

戸田 聡

北海道大学大学院文学研究科准教授

翻訳序

「ビザンツ文学余滴」と銘打った投稿をするのはこれで2度目だが、心ならずも2度目にして早くも「番外編」と称する文章を投稿しなければならなくなった。つまり、ビザンツ文学以外のギリシア語文学の翻訳を今回はぜひ掲載していただきたく思ったという次第である。

いきさつを述べると、前稿で記したように所属大学で西洋文学講座の「西洋古典文学」担当教員ということになっている筆者は、所属講座の教員たちによるオムニバス授業で昨年今年と古代ギリシアの弁論術について少しく話すことにした。つまり古代ギリシアでは法廷やら民会やらでの弁論の必要から弁論術が発達し、その中でソフィストなる人々が登場し、という、ありきたりと言われればありきたりの話である。ただ、ひねくれ者の筆者としては、そのソフィストを正當にも批判する論者としてソクラテスやプラトンが出てきて、といった形でこの話をまとめたくはなかったので、むしろ、前稿でも引き合いに出した敬愛するビザンツ学者ハンス＝ゲオルク・ベックの尻馬に乗り、ソフィスト批判でなくソフィストたち自身を称揚する形で話をまとめることにした¹。

¹ この関連で引用されるべきベックの言葉は次のとおり（ベック／戸田訳『ビザンツ世界論—ビザンツの千年—』、知泉書館、2014年、13-14頁）。「（前略）この関連で、後期ヘレニズム時代の教養の代表である弁論家・ソフィストについて一言。ソフィストこそは、ビザンツの千年を通じて、妨げなしに不可侵な者として存在した、不滅のヘレニストである。ソフィストこそ、ヘレニズムをその実質においてビザンツへと救い出し、そこにおいてこれを代表した人

それはそれだけの話なのだが、この授業を構想する際に参照したもう 1 冊である納富信留氏の『ソフィストとは誰か?』には、弁論術作家として「書かれた弁論術」を営んでいたことで知られるイソクラテスを批判して、弁論術は本来語られる（つまり口演される）ものであるべきだと論じた、イソクラテスの同時代人アルキダマス（歩き騙す?）の文章の翻訳が掲載されていた²。書くこ

である。ビザンツ人が自らをビザンツ人だと感じ、他の人々より以上の者であると思ひ出す、その教養意識は、ソフィストが体現している。ソフィストに対する非難で使われる否定的言辭は、ソフィストを擁護している——か、少なくとも、彼が体現する現象世界の複雑さを、擁護している。ソフィストの背後には長い歴史があり、また、敵の長い列が存在する——そしてそれは、彼にとって名誉なことなのである。さしあたりソフィストとは、尋常でない知識・能力を駆使し、それによって自らに嫌疑を招く者である。古代の喜劇が初めてソフィストを、コミカルな登場人物、侮蔑の対象とした——ふるったことに、ソクラテスをこの軽蔑すべきジャンルの代表者と描くことによって！ プラトンの時代にも然り、部分的にはビザンツでもなお然りであり、その結果、教養ある論争家たちはお互いをソフィストと呼んでのしり合った。この言葉で今日まさに念頭に置かれるのは、真理でなく成功と謝礼を求め、自らをほめそやし、人生哲学上の諸々のテーマに対して見せかけの関心を持っているように装い、その実ただのおしゃべりでしかない連中である。これは一方の側面であり、さしあたりその意味は、教養人の論争が既に満開であり猖獗を極めて、ということではない。本題に入ることになると、たぶん言えるのは、ビザンツにとって、ソフィストが何でありうるかについて流布するイメージを造ったのはイソクラテスだった、ということである。古代末期の人間、ポリスの人間が存在し活動する場としての日常生活は、イソクラテスによれば、高遠な哲学やその絶対的かつ非現実的な真理要求によってつねに規定・克服されうるものでは必ずしもない。変更不能な真理は哲学マターなのかもしれない、またそうであり続けうる。しかしながら日常生活では、決断が下されねばならず、哲学者による真理発見は待てない。日常が提起する諸問題は、真理らしうなことが収斂して指し示すところに基づく、根拠ある見解・信念によって処理されねばならない。これら経験を集積し、しかもなるべく多く集め、その関連を可視化し、その収斂状況を描いてみせることは、教育的観点から見れば弁論家的技術とされる——しかし実際には、それを遙かに超えている——一箇の技術の課題である。許しがたい近代化という罪で責められるのを覚悟の上で、私はあえて主張したい。すなわち、これは古代末期の「コミュニケーション学」であり、この技術は、中世の半分及び近代の相当長い時代に養分を提供した様々な不滅の達成のうちの一つを成しているのだ、と。このような評価に対して何らかの態度決定を下す資格を正當にも持ちうるのは、いったんこの「技術」を徹底的に研究する労苦を引き受けた者だけだろう。なぜなら人は、そういう労苦を経て初めて、心理学や社会心理学にかかわるいかに多くのものがこれら定理の中に詰まっているか、いかに多くの人間知識がそこで加工されているか、「汝」へのいかに多くの通路がそこで切り開かれているかを、評価できるようになるからである」。

² 納富信留『ソフィストとは誰か?』、ちくま学芸文庫、2015年、295-306頁（初版は人文書院、2006年、251-260頁）。同書の第2部第8章「言葉の両義性—アルキダマス『ソフィストについて』—」自体、全体としてアルキダマスの所説を問題にしていると言える。

とと語ることの間には大きな違いがあることは当然だが、そのことが改めてこのように語られている（正確には無論、書き記されているのだが）のを目にするのは大変興味ぶかく、そこでアルキダマスのこの文章も授業の中で紹介することにし、納富氏の訳文を教材としてコピーし、学生に配布した。

ただ大変失礼ながら、氏の訳文は読みやすい文章とは言いがたいように筆者には思われた。そして思うに、アルキダマスがどれほどの文才の持ち主だったにせよ、口演を本領とする彼は、書かれた弁論術を批判する文章を書いた、つまり言うなれば敵の土俵の上で（或いは他人のふんどしで）相撲を取ったのであり、とするならアルキダマスは、自分の文章が当の「書かれた弁論術」よりも見劣りがするなどというへまを避けるべく、それなりに工夫を凝らして書いたのではあるまいか。無論、かく言う筆者自身に文才などというものがどれほどあるか、そもそもあるかどうか、といった疑念も頭をかすめないわけではないのだが、ともあれこのような次第で当の文章のより文学的な翻訳を目指したいと思うに至った。これが今回の投稿の背景事情である。

Ludwig RADERMACHER (ed.), *Artium scriptores (Reste der voraristotelischen Rhetorik)* (Sitzungsberichte der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. Philosophisch-historische Klasse, 227. Band, 3. Abhandlung), Wien: Rudolf M. Rohrer, 1951, pp. 135-141 を底本として訳出し³、訳出に当たっては納富氏の日本語訳に加えて英訳⁴をも参照した。訳文中の番号は、底本にあるものをそのまま使用した。訳文の段落区分も底本に従っている。なお、アルキダマスのこの著作については何と 300 頁超の註釈書 (Ruth MARIB, *Alkidamas: Über diejenigen, die schriftliche Reden schreiben, oder über die Sophisten. Eine Sophistenrede aus dem 4. Jahrhundert v. Chr. eingeleitet und kommentiert* (Orbis Antiquus, 36), Münster: Aschendorff, 2002) が存在するが、同書の註釈（或いはそもそもアルキダマスのこの著作をめぐる議論）を紹介・批判するのは本稿の使命でないので、以下では特に引用していない。

³ これ以外に筆者が参照しえた批判校訂版としては F. BLASS (ed.), *Antiphontis orationes et fragmenta, adiunctis Gorgiae Antisthenis Alcidamantis declamationibus*, Lipsiae: In aedibus B.G. Teubneri, 1908, pp. 193-205 があり、両者は読みの復元で所々異なるようだが、ここでは Blass 版への言及は行なわないこととした。

⁴ LaRue VAN HOOK, "Alcidamas versus Isocrates; the Spoken versus the Written Word", *Classical Weekly* 12 (1919), pp. 91-94. 当然ながら言うべきか、原文の逐語訳には必ずしもなっていない。なお、比較的近年に刊行された J.V. MUIR (ed. & transl.), *Alcidamas. The Works & Fragments*, London: Bristol Classical Press, 2001 は残念ながら参照できなかった。

文字で記された言論を書く人々について、 或いはソフィストについて

アルキダマス

(1) いわゆるソフィストたちの中には、一方で、探究と教育をないがしろに
して、語る能力を素人と同様わきまえず、他方で、言論を書くことに慣れ
ていて、書物を通じて己が知恵を示すことを自慢し、かつでしゃばり、弁論術
の小部分を有することによって当の技術全体の力を我が物と主張する、といっ
た徒輩が幾人かいるので、このゆえに私は、文字で記された言論に対する告発
を試みるが、(2) それは私が、彼らの力が私自身とは別物だと思うからでは
なく、他のことについてと同様、書くことについても自負を持っており——私
は〈語ることの〉ついでに〔書くことの〕訓練をせねばならないと思っている
——、書くということ自体に人生を費やす連中は弁論術をも哲学をも大い
に欠いていると了解しており、そして彼らはソフィストより作家と呼ばれるほ
うが遙かに正しい、と思っているからである。

(3) そこでまずこの段階で、書くことは攻撃されやすく、容易であり、ふつ
うの気質〔の人〕にとってたやすい、といった理由で、書くことを軽蔑する人
がいるかもしれない。というのも一方で、たまたま出くわしたことについて適
切な仕方で即座に語ることに、論拠や単語を迅速なふんだんさを以て用いること、
諸事の時機と人々の欲求とに巧みに随従すること、そして適切な言論を語るこ
と、これらは、あらゆる気質〔の人〕のなしうる業でもふつうの教育のなしう
る業でもないからであり、(4) 他方で、多くの時間をかけて書くこと、暇にま
かせて手直しすること、以前のソフィストたちの著作を目の前にして多くのと
ころから結局同じことになる論拠をかき集めること、うまい語り口の成功例を
模倣すること、そして、素人たちの助言から来ることどもを手直ししたり、そ
の他のことどもを、自分自身が自分の中でしばしば考慮した上で、刈り込んだ
り書き改めたりすること、これらは、無教育な人々にとってすら元来容易だか
らである。(5) すべて善美なことは稀少であり、労苦を通じてそれらに慣れ親
しむことすら難しく、他方、低劣なことや卑しいことは容易に獲得できるので、
その結果——書くことのほうが語ることよりも我々にとって手近なので——
我々は、書くことの獲得もまた、〔語ることの獲得よりも〕低い価値を有する
と考えるのが妥当だろう。

(6) 次に一方で、語ることに優れた人々が、魂の習慣を少しも改めずとも適切に言論を書くだろうということを、思慮ある人であって信じない者は誰一人いないだろうし、他方で、書くことの鍛錬を受けた人々が、その同じ力によって語ることもできるだろうということを、信じる者は誰一人いないだろう。というのも一方で、諸々の業の中の難事を成し遂げる人々が、より容易なことどもへと考えを向け直す時に、諸事の完遂を容易にやってみせるということは、ありそうな話だからであり、他方で、容易なことどもの訓練を受けた人々にとって、より難しいことどもへの配慮は、抵抗の大きな峻険なことだからである。以下の諸例を基に人は[このことを]知るだろう。

(7) つまり一方で、大きな荷物を持ち上げることができる人は、より軽い物へと移っても容易にやってみせるだろうし、他方で、力によって[ようやく]軽い物[を運ぶこと]をやり通す人は、より重いいかなる物をも担えないだろう。さらにまた一方で、足の速い走者はより遅い者たちにつき合うことが容易にできるだろうし、他方で遅い者は、より速い者たちと並走できないだろう。これらに加えて一方で、遠くの物を良く狙って槍で撃つ或いは弓で射ることができる人は、近い物をも容易に射当てるだろうし、他方で、近い物を投げるすべを知っている人が、より遠くの物をも射当てることができるか否かは決して自明でない。(8) 全く同じ仕方で、言論をめぐっても一方で、即座に言論を見事に駆使する人は、時間と暇をかけて書くことにおいても優れた言論作者であるだろうということは実に明白であり、他方で、書くことのために時間を費やす人は、即興的な言論を追求する場合、難儀と誤謬と動揺に満ちた判断を有するだろうということは実に明瞭である。

(9) 人々の生き方にとってみても、一方で、語ることはつねに絶えず有益であり、他方で、書くことは、書く当人に力をもたらすという点でめったにタイムリーでない、と私は思う。というのも、次のことを誰が知らないだろうか。すなわち一方で、即座に語ることは、民会で語ることを練習する人々にも訴えを起こす人々にも自分の私的なつき合いをする人々にも必要なものであり、そして、しばしば期せずして諸々の事柄の時機が到来して、そのような機会には、一方で、黙っている人々は軽蔑されるべき者であるように思われるだろうし、他方で我々は、語る人々が、神のような判断力を有する者として他の人々から敬われるのを目にするのである。(10) 実際、過ちを犯した人々を戒めたり、不運な人々を励ましたり、自暴自棄になっている人々を落ち着かせたり、突然提起された告発を論駁したりすることが必要な時に、語ることの力はどれほど

人々の必要を手助けできることだろうか。他方で、著作〔すること〕は閑暇を必要とし、好機の時間を長引かせるのであって、つまり、人々は闘いのために速やかな助けを求めているのに、著作は暇にまかせてのろのろと言論を仕上げるのである。であるから、思慮ある者の誰が、好機をこれほどしくじるこの〔著作することの〕力をうらやむだろうか。(11) また、伝令が「市民たちのうち誰が民会で発言したいか」と呼びかける中、或いは法廷で〔水時計の〕水が流れる中で、弁論者が言論を書きつけ覚えるために書き板に向かうならば、それはいかに笑止なことでないだろうか。つまり本当に、もし我々が都市国家の僭主だったなら、法廷を招集したり公けの事について審議したりすることは我々の権限に属しただろう、その結果我々は、自分が言論を書き上げた時に、他の市民たちを聴取へと呼び集めるだろう。しかし〔現実には〕他の人々がこれらの事柄に対して権限を有するのだから、我々が言論に対して何らか他の配慮をすることは馬鹿げているのではないか…(本文欠落)…精確に反対である〔ような、書かれた言論に対して、ということか?〕。(12) つまりもし、諸々の単語によって取り扱われ、言論よりむしろ詩に似ていて、一方で、偶発的かつむしろ真理に似ているものを投げ捨て、他方で、〔予め〕準備して成形され著作されたように見える、そういう言論が、聞く人々の判断を不信と悪意で満たすなら、…(本文欠落)…(13) 最大の証拠。つまり、法廷用に言論を書く人々は、正確さを避け、即興的に語る人々の表現を模倣し、そして彼らは、書かれた言論に最も不類似な言論をもたらず時に、最も良く書いているとみなされるのである。他方で、言論作者たちにとってみても、彼らが即興的に語る人々を模倣する時に、それが巧さの極限であるのだから、どうして〔我々は〕、教育のかの技術、すなわちそのゆえに我々が言論のこの〔即興的な〕種類に対して豊かになるその当の技術を、とりわけ尊重してはならないだろうか。

(14) 文字で記された言論を無価値として退けることは、そのような言論がそれに取り組む人々の生活を不均質にするという理由のゆえにも相応だ、と私は思う。というのも、万事について諸々の書かれた言論を知ることは、もともと不可能なことのひとつだからである。〔同一の〕人が或ることどもを即興的に語り、他のことどもを印行する〔すなわち文字に記す〕場合、言論が〔語ることと書くことで〕不類似なので、論者にへまをもたらずこと、そして、一方の〔すなわち書かれた〕ことどもが口演の語り口や叙事詩の朗唱に似かよって見えること、他方の〔すなわち語られた〕ことどもが前者の精確さに比して低劣かつ卑小に映ることは、不可避である。

(15) 恐るべきは、哲学について語るべきことを有すると主張し他の人々を教育すると約束する者が、一方で、書き板か本を持っていれば自分の知恵を示せるが、他方で、そういったものを持ち合わせていなければ無教育な人々より少しもましでないということであり、また一方で、時間を与えられれば言論を発表できるが、他方で、目の前に差し出されたことについて直ちには素人よりも物言えぬ者であるということであり、また一方で、言論の技術を職業としているが、語ることの力を少しも自分のうちに持ち合わせていないと見られるということである。実際、書くことの練習は、語ることについての非常な難儀を許容しているのである。(16) つまり、或る人が慣れ親しんでいるのが、言論を少しずつ取り扱い、正確さとリズムを以て言葉をつなぎ合わせ、思惟の遅々とした動きを用いて表現を仕上げることである場合、このような人にとって、即興的な言論に立ち至った場合に避けがたいのは、自らの習慣と反対のことを行なうこととなつて、難儀と混乱に満ちた判断を有することであり、そして一方で、万事について不快を感じることも、他方で、弱々しい声の人々と何ら変わらないことである。そして彼は、魂の煥発的な賢明さを使って滑らかにかつ訴求力ある仕方で言論を取り扱う、などということは決してなく、(17) むしろ、長期間ののちに縄目から解放された人々が、他の人々と同様な歩き方をすることができずに、縛られていた時にそう歩くことを余儀なくされたその当の格好とリズムに逆戻りしてしまうように、同じ仕方で、著作 [すること] は、判断力に対して遅い進行をもたらし、反対の習慣の中で書くことの鍛錬を行ない、魂をよるべなき囚われたものと為し、即興的な人々の間で見られるあらゆる流麗さを妨げるのである。

(18) 文字で記された言論を学ぶのは難しく、記憶は労苦が多く、そして忘却は [公的な] 演説の際には恥辱となる、とも私は思う。というのも、些末なことはおもだったことより、数多くのことは数少ないことより、学んで想起するのがより難しい、ということには万人が同意するだろうから。そこで一方で、即興的な言論をめぐっては、論拠についてののみ判断を有さねばならず、[その論拠を] 諸々の単語によって即座に示さねばならないのであり、他方で、文字で記された言論においては、単語に対しても論拠に対しても音節に対しても判断することや、精確な学びをすることが必要である。(19) そこで一方で、言論には少数のおもだった論拠があり、他方で、互いに多少異なる多数の些末な単語や言葉があり、そして一方で、論拠は一度に一つずつ示され、他方で単語については、我々は同じ単語をしばしば使うことを余儀なくされるのであり、そ

れゆえ前者〔すなわち論拠〕の記憶は容易だが、後者〔すなわち単語〕については記憶は回復困難で、学びは保持困難である。(20) さらに一方で、即興的な言論をめぐる忘却は、明白でない恥を有する。というのも、〔即興的な言論において〕表現がほどけやすく単語が精確には磨かれていない状況のもとで、論拠の一つが〔弁論者の〕記憶から脱落する場合、弁論者にとって、それをやり過ごすこと、そして続きの論拠を取り扱うことを通じて言論をいかなる恥にもまみれさせないことは、難しくないからであり、むしろ、脱落したものの中でも、もしそれがのちに想起されるならば、その説明を〔追加的に〕行なうことは比較的容易だからである。

(21) 他方で、書かれたものを〔暗記して〕語る人々にとっては、もし彼らが何か小さなことでも闘いの下へと落とし残してやり過ごすなら、必然なのは、難儀と誤謬と〔適切な言葉を求めての〕探索が生じることであり、そして一方で長時間停止することであり、他方で言論を沈黙によってしばしば中断することであり、当の難儀が醜悪・笑止・対処困難となることである。

(22) 即興的な人々は聴衆の欲求を、書かれたものを〔暗記して〕語る人々よりも良く取り扱う、とも私は思う。というのも一方で、〔言論での〕当の争いよりずっと前に苦勞して著作を作った人々は、時として時機を過つからであり、欲求よりも長く語って聴衆に嫌われるか、人々がまだ聞きたがっているのに言論をやめてしまうかからである。

(23) つまり、語られることの長さに対する聴衆の判断がどのようなものとなるかを正確に予見するほどまでに、人間の先見が将来を射当てることは難しく、たぶん不可能なのである。他方で、即興的な言論においては、〔その場での〕言論の力を見据えて言論を貯えておくことや、長さを切り詰めたり、予め簡潔に考察された事柄をより長い言葉を通して提示したりすることは、語る者の権限の範囲内である。

(24) それゆえ、これらのことなしでは、〔言論での〕闘争自体から与えられた論拠を各々が用いることすらできないのを我々は等しく目にする。つまり、書かれないものを〔即興的に〕語る人々にとっては、もし彼らが敵対者たちの側から何らかの論拠を得るならば、或いは彼らの思惟の緊張ゆえに自分たち自身から〔何らか〕仕向けられるならば、〔言論を〕整えることは容易なのであり、というのも彼らは、万事について諸々の単語を用いて即座に示すことによって、予め考察されたこと以上を語る時でも、いかなるところでも言論を、動揺の見られる不均質なものにはしないからである。(25) 他方で、文字で記さ

れた言論を以て争う人々にとっては、もし何らかの論拠が準備なしに与えられたならば、それをはめ込んで適切に用いることは難しく、というのも、諸々の単語の取り扱いの精確さは、即興的な諸々の動きを許容しないからであり、むしろ不可避なのは、或いは、偶運テュケーから与えられた論拠を何一つ用いないことであり、或いは、用いることによって諸々の単語の配列を壊しひっくり返して、或るものを精確に、他のものをでたらめに語ることによって、表現を動揺の見られる不調和なものにすることである。(26) しかも、良く思慮する人なら誰が受け入れるだろうか——すなわち、偶発的な良いものを前にしてもその使用に反対し、時として偶運テュケーよりもまずい助けを〔言論で〕闘う者たちに与え、そして、人々の生をより良くすることがつねであるような他の諸々の技術の偶発的な助けに対してすら邪魔をする、このような練習〔すなわち、書くことの練習〕を。

(27) 書かれた言論は言論と称されることすら正しくなく、むしろ言論の幻・形・模造品のように称されることが正しい、と私は思っており、そして我々はそれらに対して、銅像や石像や描かれた動物に対するのと同じ考えをいだくのが妥当だろう。というのも、これらが本物の身体の模造品であって、鑑賞のためには喜びを有するが人々の生のためには何の用をも成さないように、(28) 同じ仕方で、書かれた言論は、一つの形と配列を有しており、一方で、本に書かれたものとして判断されるなら何らかの驚きを蔵しているが、他方で、時機の到来時には不動であって、これを所有する者たちに何らの有用さももたらさない。むしろ、本物の身体が、美しい像よりも遙かに劣る見栄えを持ちながらも、様々な業わざのために何倍も大きな有用さをもたらすように、同様に一方で、思惟自体から出てきて即座に語られる言論は、いのちを持っており生きていて、諸々の事柄に従って進み、本物の身体に似ているのであり、他方で、書かれた言論は言論のイメージ〔現代流に言えばたぶん、写真〕に似た本性を有しており、あらゆる活動を欠いているのである。

(29) さて、たぶん次のように言う人がいるだろう。すなわち、書の力を論難しながら、自ら明らかに書の力を通して論証を行なっていることや、ギリシア人たちのもとで評判の良さが獲得される際の手段であるこの営為を予め難じることや、さらに、哲学にかかわりながら即興的な言論を賞賛することや、先見よりも偶運テュケーのほうが重要だとか、〔即興的に〕でたらめに語る人々のほうが準備して書く人々よりも賢明だとか考えることは、理に適っていない、と。(30) 私自身はまず、書の力を全く否定しているわけでは必ずしもなく、むしろそれ

は即興的な力よりも劣ると思っており、そして [即興的に] 語る能力に対して最大の配慮を行なうことが必要だと考えて、これらの言論を語ったのである。次に、私が書くことを用いているのは、このことに対して最大の自負を持っているからではなく、この力を自慢している人々に対して私が、我々自身は多少のことをすれば彼らの言論を隠し [「顔色なからしめ」ということ?] 破壊することができるのだ、ということを示すためである。(31) これに加えて、群衆に対して示される演説 [的言論] のためにも私は書くことを取り扱っている。つまり一方で、我々に頻繁に会う人々には、我々が、目の前に差し出されたいかなることについてもタイムリーかつ音楽的に語るができる時に、かの仕方に基づいて我々を試すよう私は薦め、他方で、以前我々に一度も会ったことがなく、のちになって聴取に至った人々には、我々は書いたもののうちの一部を示すことを試みている。というのも、彼らが他の人々の (文字で記された) 言論を聞くことに慣れていたら、その彼らは、我々が即興的に語るのを聞いたならたぶん、価値より劣った思いを我々に対していただろうからである。(32) これら以外に、思惟の中で生じる可能性が高い進歩のしるしも、文字で記された言論から最も明瞭に見てとることが可能である。というのも一方で、今我々が以前よりも良く即興的に語っているかどうか、判断するのは容易でないからである。つまり、以前語られた言論の記憶は難しいのである。他方で、書かれたものを仔細に眺める人々が、言うなれば鏡の中で見るように魂の進歩を観察することは容易である。さらに、我々は自分自身の記念を残そうと努めて、また野心にも恵まれて、言論を書こうと試みているのである。

(33) しかし実に、でたらめに語ることを我々は薦めなどしておらず、即興的な [言論の] 力を書の力よりも高く評価しているので、 [実際にもそうだと] 信じることは適切である。つまり我々は一方で、弁論者たちは論拠と配列を先見を以て用いねばならず、他方で、諸々の単語の提示をめぐっては即興的に語らねばならない、と考えているのである。というのも、直ちに語られる諸々の事柄の提示が有するタイムリーさと同程度の有益さを、文字で記された言論の精確さはもたらさないからである。(34) そこで、言論の有能な作者でなく恐るべき弁論者たることを願う者、言葉を精確に語るよりも時機を良く用いることを欲する者、聴衆の悪意を敵手として有するよりむしろ彼らの好意を助けとして有するよう努める者、さらに、判断が煥発的であり記憶が容易に得られ忘却が明瞭でないことを望む者、そして、生の必要に合致した言論力を有することに熱心な者、このような者は一方で、つねに絶えず、即興的に語ることの活発

な練習を行なうのが妥当だろう、そして他方で、書くことには遊戯の中でついでに配慮するならば、正しい考えを持つ人々の間で、[この者は]正しい考えを持っていると判断されるのが妥当だろう。